
それは素敵な休暇の過ごし方 ～ 7 日目 ～

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは素敵な休暇の過ごし方 〓7日目〓

【Nコード】

N2789BA

【作者名】

阿佐木 零

【あらすじ】

pixivにて投稿した東方project二次創作です。休暇も終わり、無事に仕事を始めた映姫。疲れて家に帰ると、そこには見慣れた光景が広がっていた。

前日までのあらずじ

休暇と一緒にいろいろ終わった。

ふって湧いた長期休暇も無事終わり、元通りになった自宅と一緒に気分もリフレッシュ。

休み後の気怠い体を引きずって出勤してみると、想像した光景が見事に広がっていた。

「……はあ」

仕事机について最初の一声がため息だなんて我ながら幸先の悪いスタートだ。

私がない間、同僚の閻魔がある程度は片付けてくれていたのでその部分はいい。

ため息の原因は主にいつも問題を起こしてくれている部下の方だ。

「これも　これも、これもこれも……全部小町絡みじゃないの！」

尤も、それほど大きな問題ではない。

すべき仕事に遅れただのサボっただの早退しただの欠勤しただの　些細な事だけれど、

「塵も積もれば何とやら……やはりあの娘には一度お灸を」

とは言っても様子を見に来てくれた事もある。

嬉しかったのは確かだし、厳しくしすぎるのも上司としてどうかと思うし……うーん。

「まあ、まずは溜まった仕事から片付けますか」

積み上げられた書類。そのどれもが私が片付けるべき部分だ。

予想外に充実した長期休暇の代償は、倍以上の仕事。

いろいろあつた休暇だったけど

「代償としては少ない量かもね」

小さく笑みを零し、一度大きく伸びをしてから私は目の前の仕事にとりかかった。

「……ただいま」

案の定というか、くたくたになって帰宅する。

八雲家にいた時のくせか、ひとりだというのにただいまと言ってしまふ。

ただ家の中を虚しく反響するだけだというのに、この短い間ですっかり癖が

「ああ、おかえり。お疲れ様」

「うん。仕事が溜まっててね。片付きそうにないから今日は　　は

え？」

当たり前のように迎えの声が聞こえ、つい流れて喋ってしまったけど気付く。

意識が飛んでいてわからなかったけど、家には明かりがつき、夕餉の良い匂いまで立ち込めている。

「一日振りだね、映姫」

そして変わらず気取って首を傾げているのは黄金色の九尾を持つ藍だ。

「えーっと」

言いたい事は山ほどある。
でも最初に口から飛び出したのはたった一言だった。

「何でいるの？」

「これはまた随分だね」

くくくつ、と小さく笑い、

「私がここにいるって事は当然誰のせいかわかるようなものだろう？」

「あ……」

そうだ。

八雲家の柱である藍がこんな時間に私の家で夕餉の準備をしてい

るはずがない。

いや、それはそれで嬉しいのだけど、そうじゃなくて。

あの紫と橙を放っておくはずがないのだ。

つまり藍がここにいて尚且つ食事の準備までしているいう事は、結論としてはひとつしかない。

「まったく、昨日の今日で……アレはどこにいるの？」

「その扉から繋がっているよ。」

遅くなったけど、すまないねこんな時間に勝手に押しかけて」

「いいわよ。友人を歓迎しないわけがないでしょう？」

「そ、そうか。うん」

僅かに顔を赤く染めたあたり、照れているのだろう。

私は藍に教えられた扉を開く。

すると、目の前にはこの一週間で見慣れた光景が広がっていた。

「……まるでどこかのひみつ道具ね、これじゃ」

悪態をついていると軽い足音と共に小さな影が飛び込んでくる。
受け止めると、小さな影は元気良く笑う。

「四季様、おかえりなさい！」

「ええ、ありがとう橙」

頭を撫でると「えへへ」と目を細めて橙は気持ちよさそうに笑った。

「紫はどこにいるか知ってる？」

「うん！ 紫様ならいつもの部屋だよ」

「ありがと。もうすぐご飯の準備が出来るみたいだから先に行つて」

「はい！」

駆けていく橙を見送って目的地へと向かう。

そして躊躇なく駄を開け放つと、予想通りというか寝ているようだった。

でも、

「……寝たフリはどうかと思うわよ」

「んぐっ」

ビクツと体が反応したので起きているのが丸わかりだ。

大体、八雲家と私の家がスキマを通じて繋がっている時点で寝ていないのは明白だ。

寝ている状態でもスキマを操れるなら、幻想郷はとんでもない有様になっているはずなのだから。

「まったく」

こっちに背を向けている紫にもわかるように大げさに息をつく。

そして、

「さ、ご飯の用意が出来てるんだから、いつまでも寝てないで行くわよ」

悪態をつくながら手を差し伸ばした。

届かない距離。

私から歩み寄ってもいないし、紫は相変わらず背を向けて寝転んでいる。

「んもう。

ちえっ、はあい」

だけど紫はちゃんと答えてくれる。

面倒くさそうにして起き上がって欠伸をして背を伸ばしてから、どこから取り出した扇子を片手に怪しく笑むのだ。

「いいわねえ、こういうのも」

家に戻ろう。

背を向けた私に紫が呟いた。

きつと私と紫は同じ気持ちだろう。

だけど見られると悔しいから、ふたりして隠している。

「うん、そうね」

伝えられなくちゃわからない気持ちがあつて、

何度繰り返しても色褪せない想いがある。

当たり前を当たり前じゃないと思える事の大事さを少しでも知っ

てしまったから。

紫と一緒に賑やかな食卓へと戻る。

ひとりきりでは迎えられない暖かさがそこにあつて、
大切な者たちと騒ぐ大切さもちゃんとわかったから。

だから思うのだ。

それは きっと素敵な休暇の過ごし方だった
のだから。

了

（後書き）

この回でシリーズは完結となります。ここまでお付き合い頂いた皆様、ありがとうございます。

四季映姫と八雲紫。原作では仲が悪いキャラクター同士ですが、こうして書いてみると私の中ではなかなかどうして良いコンビのようにも思えてきたのですから不思議なものです。

タイトルに関してはまだまだずっと続いていく　そんな意味も込めて『最終日』にはしませんでした。二次創作は人の数ほど物語があります。これからも皆様の紡がれる物語が毎日続いていくようお願いさせていただきます、今回は筆を置かせていただこうかと思います。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2789ba/>

それは素敵な休暇の過ごし方　～ 7日目～

2012年1月7日01時48分発行